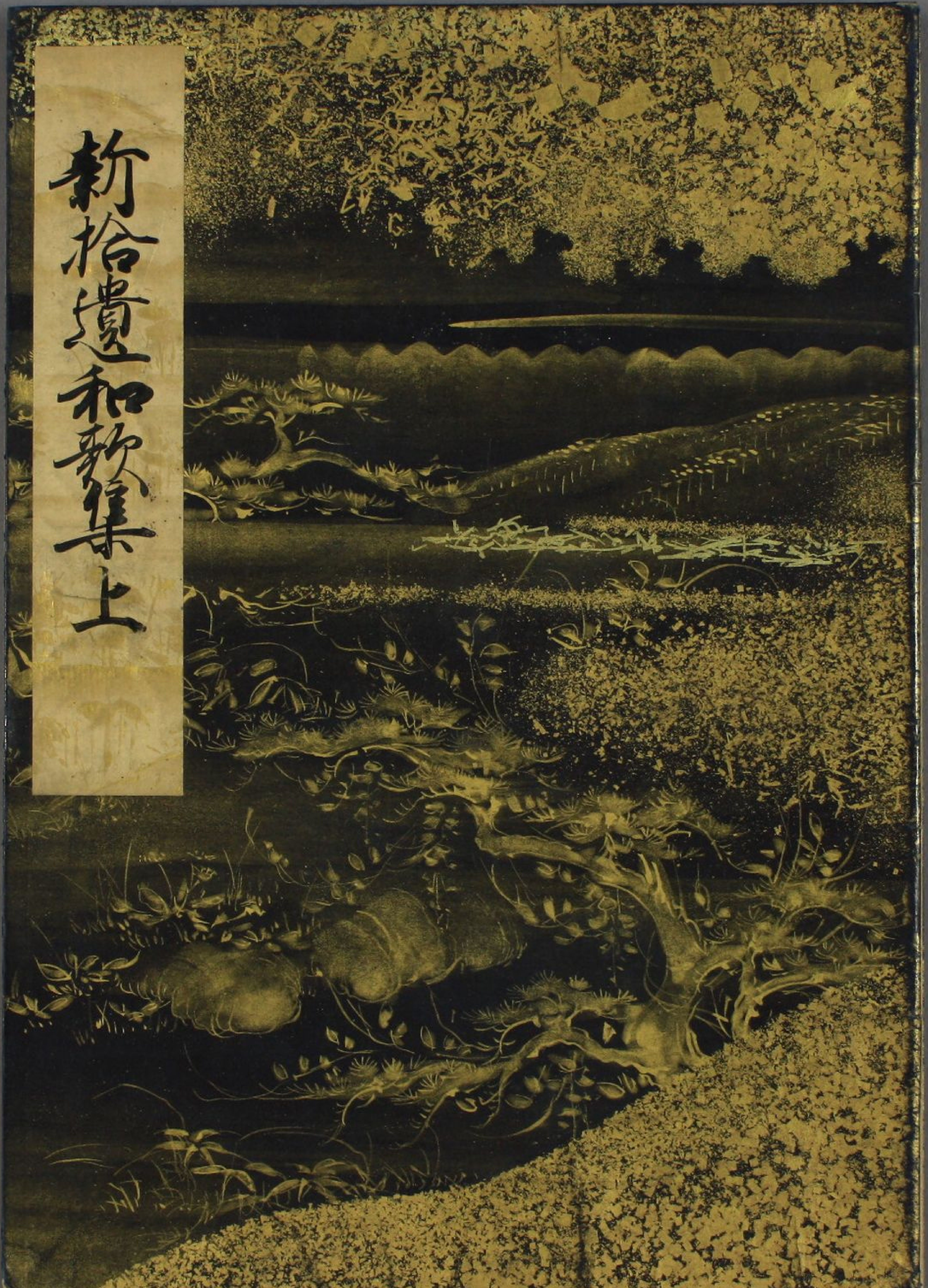
新拾遺和歌集 上



九曜文庫

[illegible]

新拾遺和歌集巻第一

春哥上

としのはしめによみ侍ける

中納言為藤

明渡るそらにしられて久堅の雲井はけふの春や越らん

春のはしめの御哥

法皇御製

あまのとを明るとしれは春やまつ霞とともにたちそめにけり

前中納言定家

ふるさとの外山の霞立そめてくるともしらぬ春の明ほの

嘉元二年百首哥めしけるつかうまつり

朝鶯

後醍醐院御製

鶯のはつねのきさの神垣よりわかなたりせの春そしらるゝ

亀山院御製

春来ぬと日影も空にしるかりき霞そわかるゝ吉野の山

藤原基俊

たつ日より花をみよとて吉野山霞の梢は春やさきけん

源俊頼

山里はまつ立霞にしられてこそあやなく春のはつはな

前大納言為氏

芝の戸ハ雪もおもとをやらす山陰さむき冬の嵐よ

嘉元々年伏見院三十首哥中に

永福門院 西園寺實兼女鏱子 伏見院后

時もおもえ霰の家ハあるかきえと松山雪も高ねも消

文保三年後宇多院に百首哥奉り

後西園寺入道前太政大臣

冬のさる霧の衣なくと思ひけりその雪けの雲そ立ふ

亀山殿にて人々題をさくりて五十首哥

つかうまつりける時冬

前大納言實教

春ハまつたつをぬひのとけきあさゆふかすむさゆるや山風

冬乃哥の中に 二品法親王覚助

足引の山ハ霧乃おさまりて冬とも志らぬさゆる空哉

文保三年百首哥奉りける時

前大納言為定

みよしのゝ山の白雪さえぬれハふるさと寒く立そまさる哉

前中納言為相

見吉野の瀧乃白糸冬ハおのかふしもゆくらすなり

嘉元内裏に百首哥奉りける時

後照念院前関白太政大臣

冬のゝ鈴鹿乃風ハみそれて河高さの岩ねもおもしろし

題しらす　参議雅経

春風に野沢のおとさえて梅さくとなきぬ水無瀬宮

我光に千年百年こそめされけれ池によ

後宇多院御製

室のうちに(て)ところては雪消山もかはらひ達

春のうたとてよめる　紀貫之

春来ちて風や吹らん花ちれはたえぬとも雪そおちける

吹風によそにてのみそ鶯のなくねは花の枝やわかるらん

寛和御時殿上うた合に

大納言斉信

わく風の音にや古巣の谷の鶯春をしるらん

山家鶯といふことをよめる

従三位頼政

谷ちかき宿にさくらや鶯の里なれそむる初音なるらん

題しらす　大納言師賢

鶯の谷の出しけふよりや雪の山路も来む日をもまつ

法性寺入道前関白太政大臣

鶯の声に霞は立くれと谷の下水とけやらすらん

兼題後番歌合に霞といふことをよめる

権中納言通俊

ぬきとめし山の霞をたつたひめくけふこそあさてふけなむ

春歌の中に　藤原清輔朝臣

朝日影またいてやらぬ岩門の山は霞のそこにけり

文保三年百首歌奉りける時

三条入道太政大臣

春なれは日よりは千すゝ九重に雲さえぬみよしのゝ山

百首歌奉りし時霞

権大納言義詮

富士の根の雪には春も志らまねと猶や空に霞そむらん

東三条入道摂政家賀屏風に

大中臣能宣朝臣

霞をわけ霞もまとふ吉野山いつしか春とおもへ覚しらす

山辺赤人

あさことにぬれしかすかの山霞ひさしき春そきにける

堀河院御時百首歌奉りける　霞を

大納言師頼

石上ふるの社も春の色は霞かくれにたちの山

建久元年内裏千首歌合に野径霞

前中納言定家

みすみの霞の衣山風（春イ）にたちのふりさへみをれてそ行

石清水社歌合に河上霞

皇太后宮大夫俊成女

棹姫の袖に錦をやとりかへて霞吹こすよどの河風

建保三年名所百首歌たてまつりける時

正三位家隆

玉嶋のこの河上と白波の志らすかとめる又霞ぬる

石清水歌合に

前大納言為家

ゆきさうるろふみのかいと汲すさかめ淀の岸根を分む 桂

嘉元百首歌たてまつりける時霞

圓光院入道前関白太政大臣

見わたせは山もとまて春は霞よそにそ志らぬ播磨路

建保名所百首歌たてまつりける時

従二位家隆

志賀の海や志ほならぬ波よする霞をとめて浦風そ吹

亀山殿千首歌に霞

前大納言為世

りうか嶋根を浪もこめまて霞のうへに春は明ぬめり

春の御歌の中に

後鳥羽院御製

明石かたそこ漕舟の浪くれて霞よりこそゆくかたの志ほ路

五十首哥合に

宜陽門院越前

春風ハ嵯峨の山ハのとかにふく霞の行衛よしみれ松

建仁元年五十首哥に

後京極摂政前太政大臣

いにしへの子日にみゆきありし跡ハ古ある松や君を待らん

題しらす

曽祢好忠

山の渡のすゝき行鶴らわかなつむへき野へと成し

百首哥たてまつりし時若菜

等持院贈左大臣

嵯峨の野の原に雪消てわかなつむらし春のさと人

嘉元百首哥奉りける時わかなを

法印定為 為氏息男 一条法印

白妙の袖も色染かすみ雪消てわかな摘野ハ嵯峨のへなり

前大納言経継

かすか野ハまためくされと白雪に消えハ残ともわかな摘なん

久安六年崇徳院に百首哥奉りける時

大炊御門右大臣

我そこのめてわかなつむれといそきまれなるらん小野の萩の焼原

寛治二年後嵯峨院に百首哥奉りける

附若菜　　山階入道前左大臣

なかにわかなつむ人足曳の山沢水にいさとこそかりて

弘安元年亀山院に百首の歌めしてまつりける時　　前大納言為氏

立かへりまたこそはるのさえかへれ雪の下くさもえそめぬらむ

文保百首の歌たてまつりける時　　芬陁利花院前関白内大臣

立かへり若菜さむしも苗代やちるそ波のまたこぬまて

中納言為藤

梅か香にあらぬ袖をもうつすまて山の衣春風そふく

旅宿梅を　　西行法師

独ねの草の枕にうつりくる垣ねの梅のにほひなりけり

文保百首の歌たてまつりける時　　前大納言為世

立よりて梅の匂ひをとりそへ袖にうつしてかなしめそ

ますらをのまつこそ人のすさけゝ小梅の花とやいふとて　　小弁

つきみて梅の立枝とすさみしをとひ来ぬ人のなきからそれ

前大納言為世家に三首の歌よみ侍りける　　侍従為親　為世卿為道息

小梅

春風のにほふにもやたのまれん梅咲宿をとふ人そ入道
百首歌奉りし時同しくと
等持院贈左大臣
このはゝ花さそふ花のかほりにて梅かゝにほふ春風そふく
入道二品親王性助家五十首歌に
後西園寺入道前太政大臣
梅かゝはね覚乃床に匂ひきて窓よりもるゝ春の夜の月
題しらす
伏見院御製
夜やふかきその梅よりて春風のとそむかふつまとなりけん
これ世にはなしためし梅乃匂ひぞ我ならぬ人にしらせまほしき

紅梅をよませ給ける
花山院御製
香をとめはなにとゝはるゝ梅をいふにせよとも色なるらん
惜鶯の梢の花にたはしまして梅か枝
よもすひつきを乃せ行けり
亭子院御製
梅花こふのこらす霞よ春り折て我ともかまほしきかな
野春雨といふことを
後久我太政大臣
春雨もふりぬるかりけりあさみとりまたこそけさは色まさりけれ

寛治百首うたに春雨

衣笠前内大臣 [illegible]大納言忠良息 家良

徒にふりぬと思し春雨もめくみにあまねき御代にあひつゝ

文保三年百首うたまゐらせける時

前大納言俊光

春雨はそめぬ緑乃露の玉つらぬかれて結ふ青柳の糸

柳をよめる　前中納言直房

浅みとりまさる色ます雨の青柳のいとより春やわたるらん

寛治百首うたに行路柳

前大納言基良 衣笠大臣男 号葉川

打なひく春さり見えは道のへにそめてそ見ゆる青柳のいと

寛元百首うたまゐらせける時柳

権中納言公雄

佐保姫の霞の袖は青柳の糸よりそめて衣なるらし

題しらす　素性法師

池水に浪はひまなくみゆる柳の糸はたえす人見る

伊勢大輔か家の歌合に池辺柳と

いふことを　よみ人しらす

春風に池のおもてもみたるらむむすほゝれたる青柳の糸

題しらす　柿本人丸

あさみとり野への青柳生そへん糸を吹くる風ハさやく
赤人
春霞たなひくそらハ夕よにこよひて照る高砂山
寛治百首歌に春月
前大納言為家
かはらむ秋の月ハいつも木間より光を花とうつろひけり
春歌とてよめる
従二位家隆
おほろの空のけしきをかすむはいへハ今すこしてよめる春の夜の月
御製
今すむよハ又おもふ雲ハいつとも山の端にまて月そまちける

海路の歌とてよませ給ける
法皇御製
春の夜ハおかしき月の夜に海路たのむとさき秋霧そ
百首歌奉りし時おもふこと
関白前太政大臣
花ともみえよわか海路金の雲やわたすらん
浦海路といふことをよめる
藤原為道朝臣
浦とをく日影のこりなくかすむ波高霧て海ゆくそ
花百首歌たてまつりける時

正三位家隆

おほよその浦よりをちにちとせをひさしくまむかへ　新勅撰

題しらず　寂蓮法師

冬草の墨みぞれの浪よ上よかゝるさすてぬかり　今

後九条前内大臣

山鳥の羽風よ高砂て雲ゐの月のあまりの空

順徳院御製

かゝいさみもとも忘しふ哉和歌ひめのさき妹なき

百首歌よみてまつりし時詠

前関白太政大臣　良経

なかめつる心もともなく花をとりにみせて詠る哉　今

嘉元百首歌よみてまつりける時おなしく

と　一条内大臣

立田の雲の通路よそにしてちをちしを惜しき哉　今

題しらず　後岡屋前関白太政大臣

思ふ河雲の通路あせしは嘯ふくみかかり孫

建仁元年五十首歌よ神楽詠花

後京極摂政前太政大臣

花をてもつまなきかな名のこりにしともへし八雲の墨

二品法親王守覚家の五十首歌に

前中納言定家

面かけに恋つゝまちし桜花さけハ立そふ峯の白雲

望山花といふことを　皇太后宮大夫俊成

山桜咲やらぬまハ暮ことにまたてそみける峯の白雲

百首哥奉りし時花　右兵衛督為遠

雲とのみかゝるにおもふ山桜ハ霧の立へたつらん

五十番哥合に春風　後伏見院御製

吹わたる霞のまちハ花のかにゆく影の桜に風わたるなり

春哥中に　土御門院小宰相

吹をひて雲とハよそに咲ゐて嵐の桜に匂ふ春風

正治二年後鳥羽院に百首哥奉りける時　前大僧正慈鎮

入相のかねは霞にうつもれて雲よりかよふをちの山

題しらす　俊恵法師

花のミやハ錦ある雲乃しはし尾上の桜花さかりかな

院御製

今そしる雲よ花の色ハ山の峯さくらかな

文永二年白河殿にて人々題をさくりて七百首の歌つかうまつりける時山花といふことを　　前大納言為氏

高砂乃尾上の雲に色そへて花よりたかき山桜哉

左兵衛督直義よませ侍りける百首歌の中に花盛開といふことを　　民部卿為明

寺近の桜は雲よりもまさりて風のミ花の香ふりまかへて

新拾遺和歌集巻第二

春歌下

花の歌の中に　　光明峯寺入道前摂政左大臣

山風の空すさに宿吹とゝめてきえ花の色そあれ

後京極摂政家花五十首歌に　　前中納言定家

霞たつ峰の桜乃朝ほらけ紅くゝる天乃川波

題しらす　　中宮大夫公宗

朝日影さすや嵐の山さくら空にまかへる花の色かな

文保百首歌たてまつりける時

前大納言為定

見るまゝに行雲ふかし桜咲よしのの山の春風そ吹

春の日もそよあか　二条院讃岐

日ふかへてあちそへきなり三吉のゝよし野の山の花の白雲

百首うたよみてまいらせし時花

権大納言義詮

分行はむかしおもかけもかなりきり雲とさかみよしのゝ山

おなし心を

前参議為秀

桜花今さかりや久堅の雲よりもそふみよしのゝ山

前大僧正慈勝

ゆきかへて雨ふるとやかく山桜さかりにふかき峰の白雲

みよしのゝみゆき桜咲やらし此ふもとのあかしの雲

前参議為實

百首うたよみてまいらせし時

前関白左大臣　九条

嵐吹とおもふさくて匂ふをは我ことに行もや雲にはれん

花間鶯といふことを

前大納言實教

雲よりも面影つくし花のえに鳴て来つるや春風そと

聲しらす

壬生忠見

おもひやれ身のかつてきえぬ山の桜は雲かあらぬと

弘安元年百首たてまつりける時

入道二品親王性助 後嵯峨王子

春雨は日数ふる野の桜かりぬれてそゆかむ花のしたかせ

花遠霞といふことを

弾正尹邦省親王

山姫のかすみの袖やかすむらしてもそめぬ花の白雲

春の比哥の中に　後鳥羽院御製

たのもしや家にゆふ花の名をよその葉に誰かまさらむ

百首哥奉りし時花

入道二品親王法守 後伏見王子

身のうさもなくさむかたに忘られて春の心そ花のなさけさ

文永二年白河殿にて人々題をさくりて七百首哥よみ侍りける時顕撰花といふことを

前大納言為家

きふとも又来ん人の桜花あけさき春はことさら色しらす

大納言経任

百敷や見かきか原の桜は色も雲ゐにたくひあらしな

伏見院御製

なかめてもみし雲ゐれは花もちらふりて面影のすむ九重の雲

正安三年二月廿七日日吉社に御幸ありて
つきの日志賀の山の桜につけて内へたて
まつらせ給ひける　後宇多院御製
君ゆへとなふかめつれ志賀の山わか春に匂ふ桜を
御返し　後二条院御製
志かの山風枝さまれと花に年へて君か御幸を花も待らん
暦応二年の春花につけて西園寺よ
りまゐらせ給ける　永福門院
咲ちるも志らへりなき宿のむかしの春まて御幸まちらん
御返し　花園院御製
代々のみゆきふりは宿のむかしを今も昔に
弘安元年百首歌たてまつりける時
前大納言為兼
あまたゝひ志かの花その庭それは春とらの都なりけり
建治元年十五首歌合に山花
前大納言為氏
み吉のゝ花は昔におなしたくひの山そあらまし
もの云ふ人の中に　後一条前関白左大臣
庭のおもの桜咲まさりてよその春をみぬらん
家の八重桜を内裏へめされけるに

えへてまゐれる　光明峯寺入道前摂政左大臣
花の色昔ふかへる春ならハこれもとみちふ捨しひと道
鳥羽院位おりさせ給ひてのち白河ふ御幸ありて花御覧しける日よみ侍ける
法性寺入道前関白太政大臣
常よりもめつらしき哉白河の花さかりてや春ハみゆき八
百首哥よませ給ひける時花
中園入道太政大臣
そことなき花の香もしたふ空ふしらまて匂ふ春風
おなしこゝろを　少輔法師
月ふへてよふけし桜花ちらぬみ山ふやとりあかさん
寛治元年百首哥に見花
藤原光俊卿下
見てそ知る花をも雪とみまかへ来ぬりとも梅ともせぬ我身せハ
花しらす　後宇多院宰相典侍
何をかも待もふ日数へて咲そめて花のさかりの
三十首哥よませ給ひける中に
法皇御製
暮そめて色もわかまし花の上ふ霞める月の影そうつろふ
文保百首哥奉りける時

権中納言公雄

桜咲雲をわけて出ぬる影の霞ぬよその月

弘長元年百首歌奉りけるに春月

前大納言為家

かすみつもの色もとふかきの雲にかすむ春月を

朝花といふことをよませ給ひける

後伏見院御製

かつえ見ゆる山桜とは明方のよ霧のまよりかつ見え明ぼのゝけ

嘉元百首歌奉りし花

前大納言経継

あはれよる春明の月よ人はこそ宿の桜に春風ぞふく

中納言為藤

立田山峰ふきおろす風の音とふる花の色に錦なる

まやこすゝ待ける花の行くらをたこれ

梅こそ人の入りしにつゝかすとて

中務

峰とほくをりきる人に見よとやは花とすさみぬ花と

みつ

雲林院のさくらをとりて武者かりにつかはすとてよめる

源道済

まだみぬ人にみせばや桜も今一枝とおもすぬめる

新院の女房ともより本院のさくらを
おりてこれはみるやとてつかはしたりけれは
後徳大寺左大臣
一枝の匂ひはうつす袖からや花の梢をゆきてみるらん
返し
よみ人しらす
一えたとおもはすおる桜なも本の心に猶のこすらん
花のちりける小桜のはゝさ枝にむすひし
付て寂蓮かもとにつかはしける
藤原隆信朝臣
こてみよと結ふこゝろをいかにして山桜花のゆかしさ猶やまさらん

返し
寂蓮法師
心さしちらさてみてや山桜結ひとめけれはなほそとて
前大納言為世人々にいさなはれて法性寺に
花見にまかりて十首歌よみ侍ける
中に
民部卿為明
家つとにおりつる花を後よかつさそはてや山かせそふく
折花といふことを
花園院御製
山もるもいかにとかめむ小風にまかせすみ枝のさくら
三十首歌よみ侍けるに花
土御門院小宰相

はるはのこりなきをとほくかすみてはなの風ふきてあ
百首哥たてまつりける時おなしく
前関白左大臣 近衛
あを花のいろをこめて春風の花をさそふとよそにみえけれ
春御哥の中に
御製
吹嵐の枝をならさぬ春毎に色をかはらぬ花の面影
文保百首哥たてまつりける時
後照念院関白太政大臣
花の香もさそはさりせは吹嵐とてしものまやといはまし遣
おしからす
永福門院内侍
吹ともをそらにはみえてちる花はまちらぬ庭の春風
前大納言為世
山桜ちるかたの色も風ふく霞の袖にかふる哉
源重之
吉野山ふもとの桜ちりもせしあさ色のそて消ぬ白雲
右内大臣
明かたの山の梢かつみえて花よりわたる峯のよこ雲
文保百首哥たてまつりける時
忠房親王 順徳院御孫 彦仁御子
春の夜は明行空のけしきまて花にそすめるあさひ山

朝落花と　後久我太政大臣

ちるまてはまたのみけるを桜木にかゝる雲をも風

落花留客といふことを　俊頼朝臣

立かへらんそてつゝき桜花ちるをみしと思ひけりのそ

文保百首歌奉りける時　六条内大臣

なかめつゝちるはなしらぬ花の下枕をとへて春風そふく

二品法親王覚助家五十首歌に落花　藤原基任

さき桜ちるをとつくさしと思ひきて梢の外も嵐ともしらん

永仁二年三月内裏三首歌に山路落花と　伏見院新宰相

梢より落る花をさそひて風の下行志賀の山越

堀河院御時中宮の御方にみくるしとわらはにて花をおりふしつかはして御前にあそ

なくへこそまかせ給けるかなあら　よみ人しらず

庭清くなかれもえせぬ水の面に花の白ひをとゝめてそみる

春歌の中に　院御製

なをまてといひて小島のゆるらん花ちるらし山川の水

河上落花といふ事を

前参議教長

吉野川花の白波なかりせは吹とはをしむ山下風の色

堀河院御時后宮殿に行幸九日池上花と

いふ事をよみ侍りける　法性寺入道前太政大臣

池水に花の錦をとゝめては波のあやとやおもふらん

折花といふことをよませ侍りける

後二条院御製

くやしくそ人の心に花をとておりつゝあやなく袖の香をとめけり

百首歌たてまつりし時花

按察使実継

散つもる花の白雪はらはてや人のまてともとはん

永仁二年三月内裏三首歌に山路落

花といふことを　前大納言為世

雪とふる花にしをりもうつもれて又ふみまよふ峯のかけみち

三十首御歌の中に

法皇御製

峰さそふ花の白雪ふきまよひ嵐に雲のかゝる山もと

二品法親王覚助家五十首歌に落花

前僧正道性 亀山院皇子

又ひとふ木の下風に消て跡とも見えぬ花の志ら雪

文永二年白川殿にて人々題をさくりて七百首の歌つかうまつりける次に暁花

後深草院御製

これも又曙の色とこそみゆれよしのゝ山の花のしら雲

寛治七年三月十日白河院北山の花御覧しにおはしましける日翫花といふことをよませ給ひける

贈左大臣 長実

多くの春きみかみならせは桜花幾よろつよかまたまつらむ

題しらす 人丸

春霞たなひく山の桜花はやくみてましちりもこそすれ

嘉元百首歌奉りける時花

前大納言経継

あすは風ふかすとも見るならはなとやみよしのゝ桜ちりけるらん

白河院の北面にて花未忘といふことを人々つかうまつりけるに

源仲正

ちらさりしこゝは春やとまるらん桜面影残らぬ花かな

久安六年崇徳院に百首歌たてまつりける

時　藤原清輔朝臣

年をへて我月ハおしえなからし花のすさハろてさ經り

六条乃家ハしハ野のやうに成ふあれに
桜のいとたりしろく咲けるを源為善
朝臣おりてりくこさくりきれいよあつ

中務卿具平親王

いつとふ咲て菊めら桜花昔の春の志るしなりけり

寛治百首よみてたてまつりける時落花

冷泉前太政大臣

山さるみねの嵐ハさそふともあかぬよりまて菊桜哉

紀貫之曲水宴し侍ける時月入花灘暗
といふことを　壬生忠岑

菊ちるふ花ハ夜ふうれれみゆせそそとふ月の入まて

燈懸水澄明　凡河内躬恒

ぬ庭乃影もうつ人ハ舞火のおもさしにみゆる春の花

弘長元年百首よみてたてまつりける時

款冬　常盤井入道前太政大臣

ちらぬまにゆきてをみむやいまの色ハかけとほそれ山吹

二品法親王覚助家五十首歌によみ侍る

んゝと　津守国冬

いく春にあひて下をひめくりわひて咲山吹乃花をとふらん

百首哥よみてまつりし時

関白前太政大臣

吉野川岸うつ浪の色まされは山吹ちりまさりけれ

水鳥の歎冬をとふらふとく

源順

河風にふかれとも山吹乃ちりぬるをせきやとゝめまし

二品法親王守覚家五十首哥に

皇太后宮大夫俊成

影うつる井手の玉河底清みやへに八重なる山吹の花

恒徳公乃家の哥合に

藤原長能

底きよみなかれて河へは影みえてそし盛なる山吹の花

あか井ますすゝ給けり花なりしそくら
つまなきかもしをはらんせんと御門おほせ
ことありけるをたはすまてたてまつ
りけれは
そつまされい養し給ける

藤原季經

あかなくにやしきにもかと大井川岸の山吹ふかくちるらや

歎冬をよめる

左兵衛督基氏

流ゆく河せの水に影みえてちりぬるをしふ山吹の花

入道二品親王覚誉

山吹の花乃鏡となる水に春の日数もうつるとそ見る

二品法親王道助家五十首哥に河款冬

西園寺入道太政大臣

藤なから山吹のをれゆく春の花に棹さす宇治の川長

藤乃花を

道済

山高み松にかゝれる藤乃花空よりおつる波とこそみれ

三条右大臣家屏風に松にかゝれる藤を

貫之

藤の花ゆへに藤なみ常盤なる松にかゝれる心やすらん

文保二年八月常盤井仙洞にて哥合

くゝ影をさくりてさへつりけるふ

暮春

前大納言実教

行春にうつろふ藤の紫のゆかりさへ後乃春の別路

後京極摂政家百首哥に

宜秋門院丹後

をゆへにかねて別にならぬとひさしとすもゆく春

山家暮春といふことを

能因法師

こゝりも月日とゝもに山里はもとのさとにきえて暮なむ

文保百首歌たてまつりける時

中納言為藤

花とちり雪とふりにしことのはもきえなむのちの暮れ
をしらす

入道二品親王尊円

たつ山尾上のさくら咲そめて入相のかねにきえて暮なん

百首歌たてまつりし時暮春

等持院贈左大臣

ものみなはそれそれ今いくか日数ありける春ときこえん

文保百首歌たてまつりける時

前大納言為定

まつのねもかはらし日もくるゝまにつもりてやよひも暮るらん

嘉元百首歌たてまつりける時暮春

前大納言為世

をしむとてとまらぬ日数のはやくもかはりつる春を
したひなん

新拾遺和歌集巻第三

夏哥

更衣の心を　　後九条前内大臣

夏人乃袖つき衣きのふまてかさねし色を春の山
家よ立かへみ給けるかなしき心を

等持院贈左大臣

時ハいまと思ひかへしてはるの衣の色よ夜ハさへかへり

首夏といふ事をよませ給ける　　院御製

春すきし花すむ山の錦かけ時しも夏の西よりそむる

百首哥の中に　　進子内親王

夏衣たちかへしよりきのふまて別し春の花染乃袖

二品法親王守覚家五十首哥に　　従二位家隆

なつ衣春にかはらて咲花乃色とや見ゆる白妙の卯の花

題しらす　　法皇御製

鶯の声もおもひ出はいまは花はちりにし夏木立哉

よみ人しらす

花さかぬ梢となりてハ吉野山春にかはらぬ桜なりけり

従二位為子

夏あささ青葉の山に郭公けるもふかき色に見えてさも哀

文保百首の歌奉りける時

中納言為藤

青葉のみ茂りまさりゆく夏の梢は花のかげとみまよふ

夏のころ中に　[illegible]前内大臣

別ての後ぞまたぬとや郭公の日数に花の跡さへあまるらん

嘉暦四年御着帯の後祭日御さきの

の雨に帳にあふひのかづらをかけけると聞て

てよませ給ける　後京極院

我袖に神はゆるさぬあふひ草人のかたにかけてみる哉

上西門院いつきときこえ給ひけるとき

待賢門院もろともにまうでさせ給ひけり

けるにたちよりさぶらひて新院の女房

の中にかはしつかはしける

基清

りつるくの御垣は[illegible]しにも二葉あふひをときまつは

返し

崇徳院安藝

二葉なる千とせをそへてのりかなあふひはかねて御垣をぞ

祭のほどはとかくしておもひそへてよみ給

ける

後宇多院宰相典侍

忘れすよ神のみ山のおちこちに昔かたらふとなるらむ

百首歌奉りし時郭公

入道親王尊道

時鳥鳴つる法をあやなくにまてやこゝの初音なるらん

貞和二年百首歌奉りし時

民部卿為明

なつ世に侍ちし此の時鳥しのひねそ思ひねかけし逢坂

昭慶門院一条

思ひねとふる時鳥ねてまつ人よそにきくらん

久安六年崇徳院に百首歌奉りける時

左京大夫顕輔

人伝にいひありそ郭公こさくともあてゝなるなは

百首歌奉りし時郭公

関白前左大臣

さらぬたに人つらき時鳥たえいつれ一声も恋

夏の歌の中に

三条入道左大臣

鳴てやふけゆくつれの夢路ふに時鳥かな

宝治百首歌よみ侍郭公

従二位行家

啼ぬやすらはぬ時鳥まてしも月の影

題しらす　前参議為嗣

時わかぬ秋の月影さして郭公声はへ雲ゐにつくなるらん

延喜十四年十二月女一宮屏風に
貫之

月夜にはおきすこしねぬ物を時鳥へ鳴まさるかな

菅家万葉集之歌
よみ人しらす

今まてもあなしやさけき時鳥夜半のまくらをと鳴わたすらん

文保百首歌奉りける時
後西園寺入道前太政大臣

つまこさそのあくひなしとあり明の月にしもなく郭公かな

承久元年十首歌合に暁郭公といふことをよませ給ひける
順徳院御製

暁と思ひてこそや時鳥まつよの天の月になくらん

題不知
後深草院少将内侍

山の端の月はよはれ郭公まつ宵よりもいくよ鳴ぬる

建武二年内裏にて人々題をさくりて千首歌よみける時夜動物といふ題を給て
仕うまつりける
法印浄弁

時鳥鳴つるあとの山のはにたゝ一声と月そのこれる

百首歌奉りし時郭公

前大納言公蔭

時鳥まつよひすきて山のはにいさよふ月の影よわるなり

夏歌中に

安嘉門院大弐

暁のねさめをさそふ時鳥なといひとこゑはまたぬなからん

後鳥羽院御製

夜のまゝやほのかたらひし郭公ね覚の空に一声そもれ

法印覚源よませ侍ける日吉社の歌合に

前右兵衛督為教

さくまにはかのみなかりぬ時鳥雲井なるそらやきゝはなれん
きゝしらす

前大納言忠季

時鳥なのみふかなの一声のあとそわかるゝ峯のよこ雲

後法性寺入道前関白右大臣の時の百首歌に

源仲綱

村雲のたえまひく空に時鳥なきてくるふしに声を空に

おなし家の歌合によみ侍りて

藤原道信朝臣

夜もすからね覚てきけは時鳥なかくに一声そまつよし

百首歌たてまつりし時郭公

前中納言有光

播磨のまつ秋ふけてや時鳥杉のたやまに初音鳴らん

建仁元年鳥羽殿歌合に山郭公

権中納言定家

時鳥山の雲にたちまでてまつとはしらでやあかつきの空

光明峯寺入道前摂政家百首歌三首に

杜郭公を

時の生田の杜の時鳥まつ十すまにはをそとまた

題しらず

源信明朝臣

郭公きかずとさけは大江のきれ杜より夜のやまかげ

大江頼重

よし交へん待さそ時鳥すゝのさ月のころやゆふま

建保内裏三十首歌めしける時

法印定為

しのぶふるさとにてこそ時鳥人待しの夜しらしみよ

百首歌の中に 花園院御製

都人待らぬときも郭公あやしみ山のなかにこそ

百首歌めされしつゐで小郭公

御製

おそすぎしやどに時鳥いかにまつ初音ところ

応和二年五月四日庚申夜内裏哥合

よ徒郭公　大納言延光

ちらしのいとゝくらん何るあるをとはやめまさらゝも

題しらす　祝部成久

あやめ草さ月のふる郭公袖まかけぬはとやそ見

前関白太政大臣

何るそのさ月乃何らんはやめらふて宿にかなん

津色早苗とふとを

従三位氏久

かへるへて我聲さつの夜草に志めひさ見て早苗　延之

題しらす　平宣時朝臣

老ふを又淵風おもて漆田よ駒ちぬはまや早苗とらん

二品法親王覚助家五十首哥よ早苗　津守国冬

里人もさ山田乃早苗とつさそいそそとやいそく也

わかしんを　弾正尹邦省親王

五月雨のそらをひまなく小山田よこみの又草や早苗むらん

元弘三年立后屏風哥

藤原雅朝朝臣

大井さ丸枝のうち田乃五月雨よ袖ひかて下ゝ早苗取之

題しらす　後二条院御製

山かけや里のかきねを吹風も涼しき宿にさそふたちはな

赤人

風よりも花のにほひを袖にうけて見るたなはたにひろふ

嘉元百首よみ侍りける時盧橘　前大納言俊定

ある袖のなこりをとめて橘の昔かよはぬ軒に匂ふらん

百首歌たてまつりし時橘を　徳大寺前内大臣

袖まてもみしはにちる橘の匂ふをしたふ昔なりけり

権律師実継

思ふことも今はいはむ月の昔も花橘のちらさなりけれは

百首歌の中に　法皇御製

ふるさとの花橘のかほりにもちらさぬ色は世をそふるさと

光明峯寺入道前摂政家百首歌に

橘　前中納言定家

橘の袖のかをりの昔おもふうつりにけりな匂ふ宿には

題しらす　土御門院御製

吹風よ昔をのこや思ふらん人ふりにける宿のたちはな

式乾門院御匣

なきてこそ思ひ出めれ橘の古くぬる風よのこゝろ昔を

寛元百首歌たてまつりける時盧橘

村雨のなごりの露やこぼるらん風にまたるゝ軒の橘

前中納言雅孝

題しらす

従二位為信

おく露も昔に袖のかをりけり思ふ草葉にかゝる軒の橘

平氏村

時鳥誰よむしと思ふとてゆふべの森にねぐらさだめん

左兵衛督直義

くもりつるまたなき物を時鳥鳴くや五月と誰かいひけん

建保四年百首に　常盤井入道太政大臣

うき雲のはるゝまよふ村雨にはらそ過ぎて山ほとゝぎす

雨中時鳥といふことを

後鳥羽院宮内卿

月影はさしもみえぬる五月雨の雲より出づるほとゝぎすかな

題しらす　清原定国

五月雨は河のむもれ木あらはれて篠やつらまて沢田子の浦

堀河院御時百首歌に五月雨

河内

五月雨は入江のまこもかりほさで浪のもみえぬ数まさりけり

百首歌奉りし時おなし心を
権大納言義詮
さみたれは淀のみこもりみまさりて村雨の後
河五月雨を
藤原信實朝臣
五月雨はやそうち川とみなせは網代やいつこせゝの埋木
嘉元百首歌奉りける時五月雨
後照念院関白太政大臣
雲そゝく槙のを山の五月雨はやそうち川の水まさるらし
橋五月雨といふことを
藤原基任
五月雨のふるの高橋たえしよりみかさまさりて見えぬ成けり
文保三年百首歌奉りける時
前大納言為定
名取川きしの埋木うきしつみいつまてとてか五月雨の比
河五月雨をよめる
権中納言具行
たまとやまさて深五月雨におちそふ浅ちは世にかれなむやあらん
嘉元百首歌奉りける時五月雨
一条内大臣
渕は世にふりぬるなからひとはすら聞こえぬ網代の五月雨は
百首歌めしてたてまつりし時おなしこゝろを

右大臣

五月雨の雲のたえまの夕日影さすか晴るゝとみゆる宿哉

弘長元年百首歌たてまつりける時

衣笠前内大臣

行も草さえもひまなき五月雨にはらき茂きの程やなからん

正治二年百首歌たてまつりけるに

前大僧正慈鎮

五月雨はふしのなかさかのこえて嶺やまかりは空に晴らん

題しらす

祝部行氏

時しらぬ山のはるさ月まて雪や梅のねをとすらん

寛治元年十首歌合に五月郭公

前大納言為氏

あやめふく軒はにかよふ時鳥さ月はいまのゝ時となくなる

平忠盛

ひさしくなきてつまこひ渡る時鳥まつは国の月つこもりまてにやまなかれけん

神祇伯顕仲

おやまにはきさ月はかりなれと山時鳥とつまとせそ

百首歌めしける時　崇徳院御製

さ月山ゆふ忘りの月まて見るすゑのこすまやいかなる声をかるらん（すまん）

題しらす

前中納言基成

とりすさふ杉のまよりかくしと埋か山端乃影そ明けり

文保三年百首歌奉りける時

中納言為藤

ともしせし宮城山のふもとかれいゆてもゆかなやたえん

照射をとてよめる

左兵衛督基氏

ともしさす鹿もねまちてこよひもやまちあかさの原

元弘三年立后屏風に蛍

前大納言為世

しら露と乱て夜な夜なに思ひけりとふ蛍かな

題しらず

藤原盛徳

石はしる瀧の白糸よるくは玉ぬきちらしとふ蛍かな

二品法親王覚助家五十首に蛍

権中納言公雄

とふ蛍そひの梢はしとならぬかふりてひかりのみえかたけれ

大井河のうかひの火を見て

道命法師

久かたの月のかつらのちかきかけまれはかれとそみゆるかた

二品法親王覚助家五十首歌に

前大納言実教

よろつ代の鴨のかみつせ流れても千とせすむへき月の影かな

文保三年百首歌奉りける時

中宮大夫公宗母

石川やせみの小川の清くしてそこまてかよふ月のかけかな

元亨三年八月大覚寺殿にて百首歌奉りける

つみてくるゝ恋とさくりて云流ゝまつり
きつゝく小鴨川としはせ絶けり

後宇多院御製

鴨の毎ゝきそてゝつるのみえぬや鴨の川霧たちまよふらん
なてしこれ浅きをとへりとゝやかとて

伊勢

神のこゝろにさあ露けきは瀬に流へやたちとそへん
影しらす

式子内親王

我のこゝろは幾とせもいつしかとみよのつ露の深やまと橋

皇太后宮大夫俊成

聖へよれゝ霧ともみえぬ末すれさ葉にむすふ白玉

建保四年四月五首歌

後久我太政大臣

水上は雲ゐにしらし山河の岩ねによはまる瀧の白浪

夏のゆふくれ中に

後醍醐院御製

みつしほや高ねの山にかゝる雲のゆきそふとみるさむき夕立の空

文永三十首御歌の中に　信実朝臣

伏見院御製

夕立の名残ひさしき宮木のゝ杜の下枝の下露もしらす

一しきり木末のいと吹とをし夕立をくる風そ涼しき

伏見院三十首歌に

前大納言為兼

なかかきの竹のはわけの夕立にそゝくよりは風そ涼しき

野納涼といふことを

入道二品親王覚誉

雲のゐる日は空にけふ峯のあさちに風そ涼しき

三首歌合に　夏夜

後伏見院御製

草むらの露の光や月みれは秋のこゝろをしらする

百首歌奉りし時　納涼

等持院贈左大臣

呉竹のよそに聞てそ杜やちらん葉に風の音の涼しき

元弘三年立后屏風によみてしんと

前権僧正雲雅

夏衣たちよる袖のはしさにむすひてそくむ山の井の水

夜乃月をよませ給ける

後二条院御製

月のゆく波のしからみかけとめよ天の河原みなかみの空

嘉元百首歌奉りける時おなし心を

前大納言為世

結ひあくる泉涼しくみる月の光よやかて明るみしかよ

題しらす

在原業平朝臣

夜の秋は月そあかき山のはのあかてなれたる里にもあらなん

白河殿七百首歌よ夜月似秋

前大納言為家

ゆくやらぬ秋のまなかのすむ月影と秋の空とやおもひそめまし

題しらす

右大納言実能

あきやらぬきなしひとへにしけれ経秋の月よりは雲ゐらぬかな

菅原為継卿

徒によねくらはやまに光をもおもひしらすな夜のまの月

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

琴の音にもこさかよへる松風としらへてもなく蝉のこゑかな

題不知

俊恵法師

山もとのへそはらぬ夕附日さすや岩への蝉のもろ声

和泉式部

きのふは文字の小おりたる風を待てあきの露ちる蝉の衣

百首哥奉りし時夏歌

藤原行輔朝臣

よる世の月とふかとそ思ふと秋たちあさに夜哥して

進子内親王

おかみさや麻の中ってすゑひきみる涼しさかとおもふ世

前内大臣実

波くる袂と涼しの川みそきはやてて瀬やさみたれん

文保百首哥の中に

後西園寺入道太政大臣

きのふまやうつるさ涼しみそき川中ふ波かけて秋や立らん

新拾遺和歌集巻第四

秋歌上

貞和二年七月七日三首歌めされけるつ
いてに早涼知秋といふことをよませ給うける

法皇御製

秋きぬとおもひもあへぬ夕暮にはしめて涼し蝉のこゑ哉

早秋の心を　権大納言義詮

蝉の音のすゝしき杜に吹そへてやかて身にしむ森の秋風

二品法親王守覚家五十首歌に　従二位家隆

秋風の吹よりかはる雲の蝉なくねもとかくなり

嘉元百首歌たてまつりける時初秋

贈従二位為子

吹かへすあまの袖にまつあたる浦風も秋とやけさは吹る覧

杜のしめなはかけていふ所そよめる

西行法師

つねよりも秋になるをの松風はわきて身にしむ物にそ有ける

題しらす　大納言経信

木のもとの露の松枝さひしくて昔おもはる秋のよの風

千五百番歌合に　後鳥羽院宮内卿

移りゆく杉の梢にかへりきて神まつりする杉の神風

神祇の心を　弾正尹邦省親王

おとろ風ふきこしくたにやかれ袖にもしらぬ露や結ぶらん

前中納言定房

夕くれやかれ〳〵とのみすゝき秋やなほおもふにちるこそ悲し

後京極摂政太政大臣

梢ふく風より先の遠山下葉に露やおきそめぬらん

二品法親王寛尊

いとゝ露そこらこほれて玉にぬきすかすおほかる秋の神世

百首歌奉りし時

嚴安門院一条

秋はまたあさちか末の夕風にわか袖まても露そこほるゝ

堀河院御時百首歌奉りけるに萩

基俊

独ねて誰か宿にか萩のうは葉におとろかすらん

悲しからす　式乾門院御匣

いつもまた萩の葉そよく風の音に秋とさくらにさひしかるらん

中務卿具平親王

秋となる萩の葉風の音をたに世はよいくそ露の玉ちるらん

百首歌めしける時

御製

わきてなと荻の葉にのみ訪ぬらんたゝ庭の秋風

等持院贈左大臣

袖にのみさそふ涙はこされ荻の葉に風よなかれぬ袖の白露

秋乃哥の中に　達智門院兵衛督

昔みし秋の寝覚をとりそめてしほ海の露こほるらん

嘉元百首の哥たてまつりける時初秋

後光明照院入道前関白左大臣

猶さえぬ色をはかへぬ衣手の朝けの風に露そこほるゝ

菅原孝標卿女

思やる人にとふ山里に一ふしの荻に秋風そふく

七夕の哥に　躬恒

久かたのあまの河原やとほからむ七夕つめのあかぬわかれに

赤人

あまの河梶の音きこゆ彦星と七夕つめとこよひあふらし

貞和二年百首の哥たてまつりける時

後普光園院関白左大臣

さらてたに契ると七夕の心つらさやかさなりかねん

建暦二年七月七日三首の哥講せし時七夕契

契久しといふとも　前関白左大臣道家

来秋もたえぬ契りや七夕の行末とほき一夜なるらん

百首歌奉りし時七夕を

入道二品親王法守

このくれは鵲の橋影ふけて星合の空に月そかたふく

題しらす

従二位行家

いくとせとゆきめくりても七夕の契はたえぬよはの下帯

貞和二年七月七日三首歌よみ侍に七夕契久

年ふりても

前大納言経顕

七夕のまた小河をも千尋ある深さは涙りやかゝる天の川波

七夕地儀といふことをよませ給ける

院御製

天の川年のわたりは遠けれとなかきてや絶もせさりけり

百首歌奉りし時七夕

前大納言忠季

宿ても頼やまよふ七夕のあふよはたかの雲の衣手

題しらす

源兼氏朝臣

よろつ代に我契る鵲の橋とわたさんこれやなきさの星合の空

中務卿宗尊親王

天の川思ふ中には舟はあまたとも我らはわたるかさゝきの橋

後二条院御製

幾秋かわたしそめけん天川かせのかよひちたえせさる橋

元弘三年立后屏風に七夕

前参議雅定

七夕のいかなる夜はまてとも待の一夜となに契りけん

秋乃うた中に　前大納言為家

七夕乃雲の衣をかさねてよはやさむしとや天の川風

内大臣

七夕もおもはぬ別乃ゆふさに今こむまてと又契るらん

千五百番哥合　皇太后宮大夫俊成女

風ふきはいさゝ小さゝてかるやとも夕ぐれにそ見て露そ置けり

思しらす　前中納言長方

夕暮はおもふこゝろも荻風にみたれもあへぬ露の白玉

瑒子内親王

風吹は萩の下葉によるなみを立花によせて露そこほるゝ

雲居寺瞻西上人房にて哥合し侍ける

時よめる

輔仁親王家甲斐

聲へたにさためなくみゆかりやの露吹落す秋の山風

伏見院三十首奉り

従二位為子

なきさわの秋萩は露に咲そめて小萩か末は花そ色こき

百首御歌に　月花門院

わかくしみましともあらぬ秋萩乃もとへは露よなほきえなん

旅乃比ろ中に　法皇御製

忘れしよ萩の下葉ちれはてゝいたつら花乃はなの秋
わかれしもをりてふましてをんといひ
ふる人のかをそへ見えけるはいつのつけゝ

中務卿興平親王

千草なる花の錦と妹まはみなへしふかきにほひなれなん
色はしらす　よみ人しらす

鶉なくいはれの野への秋萩をむすひともとゝ家

建武二年内裏千首歌よ秋植物

法印澄潤

宮城のゝ露なきさへ袖ぬれとこそよる萩の下葉は

文保百首歌奉りける時

法印定為

萩か花折てそゆかん宮城のやこれ下風よちりもそ行

色しらす　人丸

秋風は涼しく吹ぬ鴈なへてさそ見よゆかん萩か花見に

言されは霧のまよみえたる秋萩咲か折てかさゝん

中納言家持

我門に秋をしれ咲けるのはあらぬ物風やさし花そ見ゆ

百首歌奉りし時萩　前大納言公蔭

さらしなの志らむ野への萩か花散にすゝむる月はとるまをわか

月前萩といふことをよませ給ける

御製

秋萩の露ちる花の色よりも夜はの月こそ影はとなる

建長二年鳥羽殿にて野草花を

前大納言為氏

かゝる夜もその草葉に白露のむすへはとくる萩の下ひも

秋の歌の中に　皇太后宮大夫俊成

萩の野に心もしのにふされつゝ若紫の袖も花やうつらん

貫之

女郎花匂ひを袖にうつしてはあやなく人や我をとかめん

堀川院御時百首歌に

基俊

おく野への心もしらぬ秋風に乱れてよする女郎花かな

千五百番歌合に　二条院讃岐

女郎花なまめく露をさそふかは吹風に結ほれぬらん

題しらす　清原元輔

なへて咲萩の中にも女郎花おなしく野へは色ことなりけり

法印實性

色々にさける花のゝ萩くさてもまたてあさをも見ゆ

瞻西上人会に　堀河院中宮上総

都人見えこそ秋のゝすゝきすゝ虫は浅茅か露そ涙なりける

秋歌の中に

伏見院御製

露ふかき庭の刈萱の末葉にてなかれのまゝに虫の声そきこゆる

夜さむまさる虫やうらむらん野への刈萱のよさむなるらん

大宰大貳重遠

物ことに萩の錦そいそいてたえしそて野への秋霧

風さはく草の籬の萩か花ちりかふかけの袖とそみる

邦世親王

伏見院に三十首歌めしけるに

草花露といふことを

九条左大臣女

夕暮は野への吹こす秋風に千草をこえてふく萩か露

おなしこゝろを

頓阿法師

萩の上の露をおきてや雲ゐゆく雁の涙もそへてしほらん

白河院鳥羽殿にわたらせ給ひける時萩

露繁といふ事を　修理大夫顕季

鶉鳴あたりの秋の野の真葛原いくよの露にむすほれ（ぬらん）
見しらす　前中納言定家

うつらなく夕の空となかめて聲となりにけり深草の里
権中納言宗経

深草やまつ婦の里をいて秋の聲となるそうつら鳴らん
上西門院兵衛

立とまる人へいさその秋露なれともおもひそめてま然
梅壺女御

ゆきかへり古里人よ月に遠てひとり郷の秋の夕風
関白前左大臣

吹て来ぬ梢の末の限なる夕と聞ておきそさそふ
惟宗光吉朝臣

秋さへ行末の露は乱て浅茅生の小野か原に秋風そ吹
後屋入道前摂政太政大臣

おきまて露やこほるゝみちの辺の小萩か原に秋風そ吹
文保百首哥奉りける時
正二位隆教

何ち山夕霧いつて嵐にそ先田聲の浅茅か露もたく
百首乃ふくるゝ世頼りんとて秋ふかりけり
みちのくの行を行くよるまて世頼けり

花山院御製

秋をとめて草葉の露をとふゆきハ袖にかゝらむ秋とやみん

嘉元百首奉りける時

前大納言為世

あさなりと露りそもよふ野への難とたのむ蓮ハ

影しらす

亀山院御製

萩落袖よ波の露をへしくらむ秋とにまさるらん

弘安百首歌たてまつりける時

前参議雅有

今よりハあやいねそよ秋風に色付そむる庭のあさちふ

嘉元二年内裏にて翫月といふことを講せ

られけるに

従二位家隆

月綺とよハいはゝ命のつきまやはしるの夕重ねて

影しらす

前内大臣

出ぬまに小雲吹はらふ月影のさやかに晴る秋かせ

百首歌中に月

進子内親王

秋風ハ梢をはらふ夕暮に雲もしらぬ山の端の月

文保百首歌奉りける時

前大納言為世

秋風のはらふもまゝて村雲のかゝるをのへと出る月かけ

嘉元百首歌たてまつりける時月

中納言為藤

ちるも山松の入乃浪や空すみぬらんいさよふ雲に出る月影

康安二年九月十三夜に入道の松のこ九題と
さくりて歌よみ侍りし時月前雲といふ
ことを

民部卿為明

なかつきのたよふ雲もさえむ月の光にきえてゆく家
影しらす

如法三宝院入道内大臣

出そむる月の光に見ゆ川乃山の木のまもかゝ竹のはより

暦応三年八月十五夜仙洞にて三十首歌講
せられけるに月出山といふことを

従二位経有

空にさえむ光そなかき岸こえて松原つたふ嶺の月

貞治元年十首歌合に海邊月

冷泉前太政大臣

なかてるや難波の浦の夕なきに葦の末ゆく出る月影
影しらす

兵部卿頼輔

和田の原よもちハ空しひとつにて雲の浪より出る月影

後醍醐院御製

風渡る門田の末に雲晴ていなはそよけ雲そとひく月け

普光園入道前関白左大臣

出るより光そまさる秋の月くもらぬ代のしるしなるらん

宝治百首歌に　山月

山階入道左大臣

君かすむたかやの山を出るよりくもらぬ月は空にみえけり

百首歌奉りし時　月

右兵衛督為遠

久堅の空にも雲の跡なくてさえまさりけるよはの月かな

題しらす

大江貞重

名にたかきこよひは秋の半にて光みちぬる月のさやけさ

前大納言俊光女

思やる千里のほかの旅まてもてらすそね空に出る月影

正三位知家

足曳の山のはちかのかつ月影にさそはる秋のそらかな

月の歌とてよみ侍ける

二条院参河内侍

月をそくいつるまにあくるまはいつくの妹かはえのみちかへまし

宝治二年百首歌

三条入道左大臣

さらしなやをはすて山の月はみし光やかはらぬ浪おちたり

名高月と云ことを　土御門院小宰相

ちゝのあきめくりあひてもほさぬ袖までも秋はならさる月やなかめん

百首歌よみてまつりし時月

大納言能實母

見ぬ世まておもふ妹の秋の月や昔のかたみなるらん

嘉元百首歌よみてまつりける時おなしこゝろを

権中納言公雄

雲の上よゝにかはらぬ昔の面影もさなからやとる月にみゆや

建長二年八月十五夜鳥羽殿にて池上月

といふことを　山階入道前左大臣

秋乃月昔を今にうつしてもかはらぬやとの池水

後深草院御製

蓮葉の玉とそみる池水のおもにやとれる秋の夜の月

秋乃月をよませ給ける

土御門院御製

大井川しからみかくる月影よみちきそなる瀬々のしら玉

新拾遺和歌集巻第五

秋歌下

題しらす　　後光厳院御製

神代よりゝて萬代まてかはらんひかり秋のよの月

　　　　俊恵法師

浪のかへりやそらにみちそひくこしの月影をみん

伏見院よ月十五首歌たまはりける時　　為道朝臣

吹かへす嵐のまにはれそめてあなたまさてまたぬ月の影

三十首歌めしけるついてに　　伏見院御製

秋風のねやもまさきのかつらきやふけてすむ月

建仁二年石清水歌合に月照寒草　　前中納言定家

あさちふのしものかれはに袖ぬれて月やとるらん

秋の歌の中に　　左京大夫重家

まつかせも小笹の上にやとる月をやとかりけん

　　　　前参議雅親

見るままにいそちにかかるよの月のかけをしるらん

入道二品親王覚誉家五十首歌に

源頼康
みかきにし思ひいてゝ月影やかくとてすめるみなからん
家十五首歌に月
前大納言為家
天原光はしそふかさゝきの鏡とゝもにあきらけみの月
題しらす
中務卿宗尊親王
空清み月影さむし龍のよわたる橋に霜やおくらん
文保三年百首歌奉りける時
前中納言実任
いにしへのまゝにすみける鏡代々を経て神路の山にすむ月影
正和五年九月十三夜後醍醐院みこの宮と申ける時五首歌講せられけるに月前松風
中納言為藤
足曳の山のはいてゝすむ月よ松ふく風の音そ空なる
秋歌の中に
鎌倉右大臣
あまの原ふりさけみれは月清み秋のよいたくふけにけるかな
藤原為業
難波かたあしまをとをりて漕舟の音にそしらるゝ秋のよの月
従二位家隆
春日野はさかりの雲の跡もなくふりにし跡の月

入道二品法親王家五十首歌に

前参議定宗

名にたかき秋の中はの空に雲もなくて千里にあまる月かけ

水上猶月とふらむと

二条太皇太后宮摂津

世の中にすむらむ影ものとかにて秋の数そふ山の端の月

建長元年九月十三夜鳥羽殿にて水月

といふことを

前大納言為氏

今宵こそ澄める浦わの水に河風さえて秋の月影

題しらす　源有長朝臣

白妙の富士のたかねに月さえて氷をしけるうきしまか原

建仁元年仙洞十首歌合に河月似氷と

いふことを　後京極摂政前太政大臣

これも又神代はきかす立田河月のこほりに水くゝるとは

題しらす　法印浄弁

秋風の門田の稲葉に月影さむきを山の岸

安嘉門院四条

霧はるゝ月やとさへの影とさえて嵐の山をいつる秋哉

入道二品親王家五十首歌に

法眼行経

いつより光そふ月影のさやけくみえて露しけき夜

題しらす　道洪

あまとみて長からんものは山のはの岩を出る秋の月

清原深養父

草木さへかれたるすむ宿の庭の月にとほしく（まし）

前大納言経家家にて月十首よみ侍けるに

基昭法師

月影のさえてもあるか高砂の松の下かけ秋ふかくして

法性寺入道前関白太政大臣月の歌あまた人によませけるに（元）

よませけるによみ侍る　清輔朝臣

よもすから我をはなれて月影のもとにはふたつ光そしらす（ゆへ）

海辺月を　よみ人しらす

とはゝやこゝろをよせつ漕出て月と浪の枕あらし

難波より月のかけにまかせつゝ立いつる舟のよく侍

けるに海上暁月といふ事を

前大納言為世

波の上にふかく見えけり月はまた伊駒の山の岩やわけゆく

中納言為藤

なかゝらん入方ちかくかゝりにけり月よりすゝむ白浪

題しらす　法皇御製

秋風のよこともしはねそ不猶し夜はの月ゝさそなき
春日社歌合に暁月といふことをよませ給ひける
後鳥羽院御製
足引の山の木枯吹しにくもり時なきありあけの月
影しらす
寂蓮法師
聖はみなとしよりとらし枯て雲のはたてにさえるさよ月
建長三年内裏秋十五首歌合に秋雨
従三位有家
日くらしのなく夕暮はさき雲に村雨そゝく杜の下葉
建保四年内裏二首歌合に
正三位知家
ひくらしの鳴山陰はくれはてゝ夕日のこれる峯のしら雲
秋の歌の中に
後鳥羽院御製
秋風や尾花か末の波よりたちみたれ萩のそよく夕暮の空
正治百首の歌たてまつりける時
後京極摂政前太政大臣
みたれ萩のかゝれなる風のそよくに妹をまつそと手まね御治
麻くと
御製
かりかねのかへるへのもとは田の小山に思ひともとかす毒やふらん
建長二年鳥羽殿にて聖秋廊といふことを

後も行けり

後嵯峨院御製

秋の野におかれしに鳴虫も今はかふ出て声をしのふ

嘉元内裏三十首歌に

法印定為

はひかくる野原の露にたつも我手枕と虫や鳴らん

秋のうたの中に　　左兵衛督直義

月影のいる野の薄打なひき鳴露よ虫そなくなる

後醍醐院にまゐらせし家々と申せる時五首

歌めされけるに月前虫

前大納言経継

高砂の尾上の月に鳴虫の声すさのかた松吹風

百首歌たてまつりし時虫

権大納言義詮

声こひの涙やおちて鳴くならし野分の草の露とそえん

西行法師

かねてきんそいとゝ夜寒の月まつ嵐さそふ声

元亨三年九月十三夜後宇多院に三

首歌めされけるに月前虫

中納言為藤

小倉山秋はこよひそ鳴虫の声とふ岸にまつ月影

建長二年八月十五夜鳥羽殿にて暁鹿
といふことを　前大納言為氏
まよふきの尾花か末はしらつゆのつまとふ山の嵐の声
弘長元年百首哥たてまつりける時鹿
常盤井入道太政大臣
かくしつゝ鳴弥山のしかそ秋の夜に小生てや妻とふらん
左近大将師良
鹿の音そ空にきこゆる又音ゆくてつまとふや尾上なるらん
文保二年九月殿上の哥合に鹿
権中納言通俊

山里は霧立こめて人めなき野へに鹿の音そきゝて
悲しらす　源家清
行て見ぬは尾花まさき秋風にさそはれてこそ鹿の鳴らん
西園寺内大臣
山里の鹿の鳴音そ長き秋の仮寝の友とはなりけれ
小野小町
妻こふる鹿の音にさよふけて月の宿さへ恋ひしきを
入道二品親王道覚
高砂の松を友ともなくしゆまて妻こひする鹿そ鳴なる
増基法師

夕暮や松の梢に吹風乃身にしむ時て簾をおろ（す）
四条太皇太后宮歌合に簾を
康資王母
なにはえの蘆の簾の吹かへしもろおりとや夏はなかなか
野簾といふことを　前参議雅家卿
あれぬとて妻やこもらん女郎花おほかる野べのへだてなきみ　契
従二位家隆
さとゝほみ雲まに月の影もりてくもるもさびしき山里の秋
前参議経盛家歌合に
清輔朝臣
簾の音に吹くるゝ風のをちこちの嵐やこのめのこゑもかれなん
二品法親王覚助家五十首歌に秋簾
従三位為理
秋さと妻こもれるやこもれる山里の風に簾を吹あげて
弘安元年百首歌たてまつりける時
前大納言為氏
夕日さす田面乃いなば打なびき山もとすぎて秋風ぞ吹
百首御歌の中に
花園院御製
夕日さす田面はるかに末とほきならびのさとの色ぞ暮ゆく

百首歌奉りし時秋歌

中園入道前太政大臣

しら露のよるはあらしに吹あへてもろくそ散す萩の上風

文保三年百首歌たてまつりける時

権中納言公雄

明渡る山もと遠く青く晴て田面の下にあきかせそ吹

上西門院兵衛

萩原の中にそ秋もみえにける よそのまつには風やさむけき

永仁元年八月十五夜後宇多院に十首歌

めしけるに蟲を　大藏卿澄将

秋をへてなるゝ枕の葉しろや五十あまりの秋そふにては

悲しからす　順徳院御製

浅茅生やとこは草葉の露なくて嘆をかくる聲の秋

前參議為實

蟲のねはおきちる露にうら枯てよさむのころの在明の月

前大納言為世

ふけてやうら枯よわりはさら原虫の音まても露やおきそらん

文保百首歌たてまつりける時

後光明照院前関白左大臣

蟲なくさ浅茅か庭の露の上に月まても虫の聲そのこれる

中納言為家

よもすから枯ゆく小萩の葉陰よりあはれをそふる虫の聲かな

月前虫といふことを　よみ人しらす

長月の在明の影はさやかにて松虫の声

家五十首の中に　弾正尹邦省親王

わきて猶あはれまさる時そとや夕は虫の音も立らん

寛和元年八月十日殿上にて虫の歌を給く

に合せさせ給ける　花山院御製

秋の野は虫やありとおもふかな声をきゝすき鳴わたるかな

題しらす　信明朝臣

鳴今はいつかは雲の上にきこえん秋の虫の声

延喜御製

秋風も吹しらにけり今よりは公鳴虫の声とまて

中納言家持

霧ふかて鳴はさしにまりひまもなく時ならしとや声をたてなん

後九条前内大臣

鳴そてさむき秋や山城のいはたの森のこゑそ聞ゆる

百首歌奉りし時

藤原雅経朝臣

今よりや秋の枕はいつかたかしき袖の露とまかせて絡

名所百首哥たてまつりける時

僧正行意

夕霧のまよひにかくれ吹風にあらしのさとにさして鳴なり

題しらず　　後白河院御製

雁かねは雲ゐ遠く行過てさぬ萩の下葉に露ほしきころ

相模

思へとも雲ゐはるかに過て雁金の中空にのみ鳴わたるかな

後鳥羽院に五十首哥たてまつりける時

寂蓮法師

鳴わたる雲ゐの雁もしらましな人たのむ秋風のこゑ

題しらず　　紀友則

初雁の鳴こそわたれ雲ゐより夜をさむみてや吹月影

坂上是則

いくさとに夜さむのまにや鳴ぬらん雲ゐの雁も旅と鳴らん

平政村朝臣

行過し春の別は忘れてあきくれはきく初雁の声

平義政

天川とわたる雁やしら雲の中にかけし玉章

入夜雁といふことをよめる

西行法師

くすふく玉江のなかにて鴈のねまてるかやとるやさしき

伏見院三十首哥に　従二位親子

暁やらぬ鴈金の空に雲かゝるつらそみえね海の夕暮

百首哥めされし時鴈　御製

てらしみえそめちくもゐの空に見えつ一行の鴈の聲

性助法親王家五十首哥に　後西園寺入道太政大臣

夕暮は雲に乱れてとふ鴈の行末さためす秋風そふく

題しらす　躬恒

秋風に山とひこえてくる鴈の羽むけにきゆる嶺の白雲

百首哥奉りし時鴈　前参議實名

小山田の庵はねられぬ夜半にねさめて鳴鴈の聲さけ秋の夕くれ

秋田をよめる　従二位為信

鴈鳴て秋さむくよるまには稲葉のをくてもかるなる田付よせり

正和五年九月十三夜後醍醐院みこの宮と申ける時五首哥よ月前擣衣　中納言為藤

秋ふかき月のよな〳〵むかひきてそらにさえゆくかねのおとかな

権中納言具行

雲人のそらもなかめしいそきまて月やすむらむ秋のよな〳〵

元弘元年九月十三夜三首哥講せられけるに同心を

後醍醐院御製

常よりもかさねて月もさやかなる秋の月みるさむしろのこゑ

貞和二年百首哥奉りける時

中園入道前太政大臣

長月の月を秋さむものいねそにおきゐて誰かねさるらん

元弘三年九月十三夜内裏三首哥に月露

摂政と申しとき　前大納言為定

わかれて月みるかけのこゝろよりまさむ思ひはまたそかなしき

入道二品親王尊円家五十首哥に

従二位行忠

秋もすく旅のこゝろをおもへはて月よりさきにあさ〳〵も

権少僧都経賢

馬の音ゆくまて小笠の袖ぬれてとまるらん宿

宝治二年百首哥奉りける時摂政と申しとき

正三位経朝

霜なかき夜さむの旅ねしく袖に秋もまたねさめそいとゝかなしき

文保百首歌たてまつりける時

芬陀利花院前関白内大臣

咲の盛秋の小庭のませのうちもこそあかぬ色の数

貞和二年百首歌たてまつりしに

後三条前内大臣

時よ霜のおく枝見えならむそのまゝ千重の籬の花に移ろふ
色しらず

前参議為秀

あちこちむすぶ霜まくらの花のなかよりうつる露の下葉

貞治百首歌たてまつりける時重陽宴を

前大納言為遠

もろ人の袖に九重に匂ふてふ菊にみがける露のさかえて

百首歌奉りし時

関白前左大臣

長月のとよのあかりのしるしとて今は昔にかざしきさ

黒戸のまへに菊をうへられてありけるを

堀河中宮

咲ぬればよそにこそみれ菊の花天つ雲井の星にまがへて

延喜十八年女四のみこの屏風に

貫之

いつまでもかはらん長月の在明の月にうつろふ菊

崇徳院乃御時菊送多秋といふ事をつかう
まつりける　大炊御門右大臣

いくかへり千世乃始にあひぬらん色もかはらぬ白菊の花

入道二品親王性助家にて菊をよみ侍りける
時によめる　法眼行済

かしらへ八千代まて匂へ菊の花老せぬ始を重て

長暦二年九月歌合に
土御門右大臣

匂ひそふ陰されさりけり神無月のわたりにまして菊の花

寛平御時菊合によめるもしろきの菊を讃る
よみ人しらす

名にしおへは花の中にも菊の一りとをさかる神無
月しらす　人丸

あま雲のよそにも移ろひしられ霜かれむともしれなん

風の神無月とも多くりそ菊ふて我ならみよ人の為
よみ人しらす

とふ人もなきつの時多はおきそへさかれ山ふらんあらん

家百首歌に　洞院摂政前太政大臣

神無月多ほふるふみにも曇らぬ立枝いろ付ぬらん

嘉元百首歌奉りける時

従二位為子

秋山はしくれぬさきの下紅葉つゆやしもやそめはしむらん

題しらず　大蔵卿隆繁

まさきちるみねの雲や時雨てとをつらんみちしてまりころも錦　やま

百首歌めしける時よませ給ける

崇徳院御製

入日さす旗雲にまじりてくらふ山の峯の紅葉を

弘安元年百首歌たてまつりける時

二品法親王覚助

夕日影ゆきもやまるるねのもみちして空もくれなゐのいろそふ

百首歌に時紅葉　前関白太政大臣　兼平

紅葉ちるあらしやおろすらんちるさきとそ秋の名ごりの

亀山殿にて三首歌よみ侍しに

ふかき山ゆふきちるそのあき風にみゆるかりの時雨も嵐の紅葉は

弾正尹邦省親王

題しらず

前大納言為家

ゆふやまのよそにはみゆる紅葉のいろにはなにそむかしもみちて

権僧正果守

足引の山の紅葉やみちてゆくせの錦なりん

正三位成国

そのまゝにしくれて山の神時雨そめて紅葉の錦なるらん
藤原清正
しくれハふりまかひけりやまの紅葉は錦なれハ雨
人丸
紅乃やしくれの雨ハ降しかと龍田の山のいろはかはらて
清輔朝臣
小倉山木すゑのもみちの散るは嵐の風乃おとをかはらり
長保三年大井川に行幸九日よめる
権大納言公実
水のおもやよそにもみよと紅葉はよりきてつものさゆさふかへ紅葉ハ

小一条院大井河にまかりける時紅葉
浮水といふことを　大納言経信
秋ふかく成ゆく時ハ大井川波の花にもみちちりかり
紅葉をと　大中臣能宣朝臣
わか庭よ影のしみゆる紅葉ハ秋のなこりに波やたつらん
秋乃あはれ中に　万秋門院
山姫のそめまくにそめるさは紅葉におもふ松やなからん
今出河院近衛
たつしふとれこの松乃村雨にそめのりみちに秋ハふゆかん
僧正良瑜

ねてもさめても小林のさとをわすれてまほろしの夢のかけ

紅葉送秋といふことを

中納言定家

ゆりつゝ紅葉の色をみし時そ今日秋はなきを思ふ

秋の暮つゝ白河にかへりてよみ侍ける

前大納言公経

都出しけふこそ小倉山里風そみちもとかへしは旅路なりけり

陽成院御時歌合に

よみ人しらす

年ことにあはね姫とおもひきやなしむらくのなれをとめけむ

暮秋の心を

刑部卿範兼

おしめとも暮ゆく秋はいかにせむとをしむ心をきえはつるかな

百首歌よみ侍りし時九月盡

内大臣

暮ゆく秋のなこりをなけきやせん袖に涙の露をおきて

福原に侍ける人にかれる月つこもりの日

まうこふまかりて海邊九月盡の心をよみ

侍りける

平経正朝臣

今日すくることなりあへてまた秋の波ちか小林をしらぬかな

千五百番歌合に　大納言通具

よりゆく老乃影にさへ秋ふけて月も在明になりにけるかな

いまだみこの宮と申ける時十首歌めされ

次に暮秋霜といふことをよませ給けり

後醍醐院御製

秋萩の末野は草も枯て霜にむすべる在明の月

題しらず

従二位家隆

在明乃かげのかはみえし月影もさえて霜夜の空に

ゆく林

新拾遺和歌集巻第六

冬歌

弘安元年百首歌たてまつりける時

前大納言為世

露にしほれし野への草葉風さえて又霜かはる冬はきにけり

嘉元百首の歌に時

一条内大臣

きのふ迄秋のなごりは露ともにおきし袖にふる時雨

百首歌めされし次によませ給ける

御製

さらにに妹の別乃波より袖をかはしもあかぬなかの時雨哉

題しらず　法皇御製

枝のやふにみえてきえぬとてはつれそて時雨

大蔵卿有家

本のそらも山風の嵐より時雨はなれ行くさき雲

百首歌奉りし時よめる

前大納言落

行そらの雲乃ゆきゝに空はれて時雨は風の山にふるなり

文保三年百首歌奉りけるに

六条内大臣

吹おくる風のまにまに浮雲のかゝらぬ山は時雨ふるらし

嘉元百首歌奉りけるとき時雨

昭慶門院一条

あえて小雲乃たえゝる山のはに風をたよりに時雨ふるなり

中納言為藤

吹よわる嵐のひまにさそふ雲やとをくにやとる時雨なるらん

元弘三年立后屏風に

正二位隆教

三輪山はしるしもみえすかくれけり杉の檜原の雲に時雨て

前大納言為世家にて時雨をよめる

従二位為理

うき雲をはらひもそめぬ山嵐に立かへりてもふる時雨かな

冬歌の中に　近衛関白前太政大臣

玉くしけ二上山も冬さむみあけ行そらより降時雨かな

文保百首歌たてまつりける時

三条入道太政大臣

山嵐の吹にまかせてさそふなる木葉は冬の神無月かな

題しらす　権大納言公房卿

いはせより吹くる風のはらふにも梢をしらぬ庭の紅葉は

宝治二年百首歌たてまつりける時落葉

冬きてははらふ嵐の山かせにつきせて木葉ちらぬ日もなし

山階入道前左大臣

伏見院三十首歌中

ふるさとは冬をやはらふ初時雨庭の木葉に音信ても

永福門院

題しらす　前大納言良冬

吹さそふ嵐の空の浮雲に時雨をそへてちる木葉かな

権大納言公明

村時雨はれゆくあとをめくりてもやまや木葉ふきまく峯の嵐に

伏見院御製

浮て行雲のあとよりむら時雨ふりもかへすそ晴わたりける

家に五十首歌よみ侍りけるに時雨

二品法親王覚助

木葉ちるみねも嵐やはらふらん時雨にはるゝ雲の空

題しらす

如願法師

しくれつゝ山のはみちも夜そこてさひしき暮にふる時雨哉

弘安元年百首歌奉りける時

権中納言公雄

影月のしつくやとらん浮雲のかゝらぬ空は猶時雨つゝ

冬歌の中に

皇太后宮大夫俊成

うちしくれ人の袖をもぬらすかなやとるこのはゝ嵐なるらん

後徳大寺左大臣

山人の袖はぬれなん木のはちる蓑は時雨にたえすやあるらん

寂然法師

いとゝしく物思ふ秋の独ねはおとろかれけり夜半の時雨に

弘安八年八月十五夜三十首歌奉りける

時時雨驚夢

前大納言為兼

夢路まて夜半の時雨のしたひきて残る枕に夢そさめぬる

題しらす

後法性寺入道前関白太政大臣

おとつれは木葉の音もかはりせはいつかそ冬の限をしらまし

陽子内親王家宰相

みしかまて深き梢のおちくる庭の落葉とかはしらん

三条右大臣家屏風に

貫之

山さとの梢をさしてあきくれは人はまたくはなれつ紅葉て散しらす

殷富門院大輔

水上に風渡しし大井川もみちを誘ふ嵐の山てを

嘉保二年大井川に行幸の日よめる

中納言祐家

大井川ちるのゆきゝに紅葉もなきまとひこそはせきさへかへ

寛治五年十月白河院大井川にみゆきせさせ給ひて落葉満水といふ事をよませ給ひけるによみ侍りける

権中納言俊忠

大井川井せきの流もみえぬまてちる紅葉葉にみなそこもなし

宇治にまかりて網代にてよめる

躬恒

河上に河風のふく網代木はもみちはよへそおちまさりける

貫之

落つもる紅葉をみれは一とせの秋のゆかりは網代なりけり

最勝四天王院障子の哥

慈円法師

宇治山の嵐におつる紅葉やかはにながるゝ錦なるらん

祐子内親王宇治にわたりて侍りけるに

雨にぬれてたちならひつゝそてやつれけり

橘俊綱卿

神な月おさとの山もちる時はやがてみちも錦なるらん

返し

祐子内親王家紀伊

かみな月昨日の山の紅葉をもよその錦のくちなるらん

文保百首哥たてまつりける時

前中納言雅孝

篠ふく秋は風の音にきえて志ら霜ぞ置く野への夕霜

延喜十三年乃菊合に

是則

菊乃色も冬に嵐風に散らさぬをきこえやおく霜は

躬恒

菊の花ことさらもさかさりし今まではの霜のおくさへつゝみ

建保五年内裏哥合に冬山霜

信実朝臣

よそのねにひとつにかゝる冬の日に霜置く山の下草

後宇多院に十首哥たてまつりける時冬哥

前大納言實教

風さゆるあさちか庭の夕日影くるれはやかて結ふ霜哉

冬草帯霜といふことを

西行法師

難波江の汀のあし小萩はえて浦風さむき霜の夕暮

百首哥奉りし時冬哥

等持院贈左大臣

霜ふかき難波の蘆の枯葉よりも妹のまくらの風の音哉

御製

かきりあれは楢もこそやはささくはり嵐にはやく霜の下おき

もしらす

土御門院御製

見わたせはましの萩も霜枯て緑そのこる小松原

嘉元百首哥に

贈従二位為子

冬されはとをの小枯の山里に人めや草のゆかりなるらん

鷹狩をよめる

権大納言忠基

狩人のいる野の草の霜枯はつまに鳥やかくれかねなん

前大納言為家

みまのやくるれはむかふ屋かたの鷹をとましるかにしらせつゝ

題不知

前中納言雅孝

足なと汀や蘆の枯葉に風冴えて霜夜の月に千鳥鳴くなり

中納言家持

楸打ふるゝ風に千鳥鳴く声のよはさへ月影さゆ

嘉元百首歌たてまつりける時千鳥

今出河前右大臣

冬の夜はさえゆく河風さゆる秋の浦(たけ)まさる月に千鳥鳴くなり

題しらすを

法皇御製

なるみかた潮の千鳥鳴く声もうら遠さかる友慕ふらし

暁千鳥といふことをよませ給ける

後二条院御製

浦とほく潮千鳥も声さむし霜の色さへ夜半の月影

文保二年八月常盤井仙洞にて百首の時

人々をさそひて百首歌たてまつりける千鳥

正二位隆教

わかの浦や潟(沢る)にしらぬ友千鳥こと浦によるも声そ悲しき

題しらすを

中務卿宗尊親王

夜をさむみ山おろし吹えてさゝ波の比良の湊に千鳥鳴くなり

湖上千鳥と

中納言為藤

鳴とりハおきつ風ふくかの比良の光鏡の山のおろしに千鳥なくなり

題しらす

源義高朝臣

入ゑより通路もはそたえしよりをしとの池のおもに

兼好法師

おかめのいにしへ越に波こえて上毛の霜やはらふらん

崇徳院御時十五首哥に

八条前太政大臣

秋ふけてかもの上毛をさえしぬる幾度霜のおきやそふらん

家五十首哥によみ侍けるに池水鳥

入道二品親王道助

住侘て池のおもをもたつ鴨の玉もにはらふ跡をしたふ

従三位頼継

中〳〵に霜よの空やさむからんこほりにとつる池の水鳥

守覚法親王家五十首哥に

前大納言隆房

霜さえし上毛ははらはぬ池鴨の玉もの床はつらゝゐるらん

百首哥たてまつりし時

民部卿為明

はやせ川水はこほりし床の霜袖のおもに月やとるらん

おもひしるしを

信寂法師

さえまさる袖の嵐をとくて霜夜の床に月をみるかな

元弘三年立后屏風に五節をよませ給ける

後醍醐院御製
袖の上は津ゆしも思はぬ秋の夜の月のしつくもかゝりけるを
寛治二年百首歌奉りける時秋歌
従二位行家
月の山風さえて玉積いりくるとよのあかりにはひかりそへなん
冬乃歌の中に
前大納言為家
まさむなるとよのあかりの霜の上に月はさえ行雲の上人
中納言為藤神無月の比小田河にありて
人々十首歌講しける時河上冬月
前大納言実教
あさき瀬はおともやみて冬かれの河音たえて月そ宿れる
題しらす
遊義門院
冬のよのこほりのひまもとほりけり月影さむし山河の水
祝部成光
高つ波の音はおさまりて夜の風ふけゐの浦にありあけの月
前大僧正慈道すゝめ侍ける日吉社三首
歌合に冬月を
前大僧正実超
まの浦や入江になひく冬枯の荻の枯葉は波にやとる月
湖辺冬月といふことをよみ侍ける
僧正慈勝

まかの海やかしの山風さゆるよりこほりてすめる月

百首歌奉りし時おなしく

権中納言時光

さゆる夜の霜を重ねて袖の上にやとれはこほる月の影

冬歌中に

按察使公敏

置そふる草葉の霜の露も白妙にやとるもさやけき月かけ

千五百番歌合に

前大納言忠良

今はとてあさちか原の霜のうへに月影さむし小野の篠原

永仁五年仙洞歌合に

昭慶門院一条

秋の色は紅葉の霜の露もみえて月そすみける

文保百首歌奉りける時

権中納言公雄

暁の時雨の雲の山のはに影さえわたる冬の夜の月

題しらす

左近中将為成

しくれつる雲のいつくに風はやき木の葉にやとる山の端の月

冬月をよめる

祝部成茂

秋よりも霜におほふに澄わたる山の端の月

左京大夫顕輔家の歌合に

祝部如仲

久堅の空ゆく雲のなきまゝに月乃光もさえそみつ

二品法親王覚助家五十首哥に冬暁月　前大納言為世

さゆる夜の霜をみ空の村雲とこほりてつゝむ有明の月

中納言為藤家五十首哥に河氷　頓阿法師

音もせぬ川みなそこすゝ波のまにおちて流せきとめて

百首哥奉りし時氷　右兵衛督為遠

行水の日かすにそへてこほるかや吉野河岩こす浪もたえぬ白浪

文保百首哥奉りける時　前大納言為定

立帰る霜もきえなて冬川のつまにこほれる風の波

冬哥乃中に　院御製

菅河やむすふふちの下むせひなかれもやらぬ霜をさむ　きし

権大納言宣明

音たえ嵐やはまにふくらん行波こほる志賀の浦

文保百首哥奉りける時　従二位宣子

風さえてならの落葉に玉ちりて音にさへむすふ霰かな

西行法師人々すゝめて百首歌よませ侍けるに　前中納言定家

郊人乃竹は何を我なしきにしくれふりかゝる霰なるらん

建保五年内裏歌合に冬夜霰　参議雅経

宇多の野や宿かり衣さえすらむ暮もさやかに霰ふる也

文永十五首歌より　法眼源承

玉ともろくいかにおさまの根まし衣夕日もさしも霰ふる也

嘉元百首歌めされけるついてに霰

後宇多院御製

風さゆるみ空は雪けに成そめて吹しく庭にちる霰

文保百首歌たてまつりける時　前大納言為定

庭の面はまだふりそめて跡もなき松の葉しろくみえそめつ白雪

雪乃歌とてよめる　従二位為子

いとゝ又雪には跡もなかりけり人めまれなる庭の冬草

百首歌奉りし時おなし心を　前大僧正覚俊

いはくとも汀そみえぬ池水におなしく庭は埋む雪

題しらす　法印長舜

よしの山花の雪とも言なして梅さくころの雪は消

佐保山霞とふかけりと　後京極摂政前太政大臣

里わかぬ雲の中山をしるや佐保姫の鬢は猶そさし（しき）

建保四年百首歌に　前大僧正慈鎮

神山のふもとにひらく人こそむすふらめくもてゐる里の

題しらす　中納言家持

神山の麓に降る雪はむさし野かせとふきまして梅とけれ

好忠

都にも春もゆきふる雲まよひ間人めかれしみよしのゝ里

文保百首歌たてまつりける時　六条内大臣

とゝめえぬ月をもしらぬ山里に春まつ雲は猶やふるらん

題不知　平親清女

桜さくみねの高嶺の雪きえて咲まちぬ日数のつもる雲哉

文保百首歌奉りける時　後花山院内大臣

今よりはたえてもみえん白雲のつきせぬ花に猶かゝる哉

寶治元年十首歌合に野外雪

後嵯峨院御製

はしたかのとかへりをみえぬ武蔵野やおほまさる雪の曙の空

松上雪

後山本前左大臣

老か身のふりにしとやちよ代をとふく雪とつもる松の葉

源光行

あけくまる雲の緑をうつして雪をみさへや今よるらん

源親貞

小高みの神山の名は高て松の葉毎を雪ふりにけり

寶治百首歌中に雪

後西園寺入道前太政大臣

月影もさえぬる山の峯の光とともに嶺のしら雪

寶治百首歌めしける次に冬月

後嵯峨院御製

白妙の光そまさる冬の夜の月の桂に雪つもりし

題しらす

後鳥羽院御製

たかの袖やしきぬらん二條の橋の東風の暁

百首御歌の中に

二条院御製

冬の夜のさゆるに見えしみ山の白雪今そふるらし

白河殿七百首歌に河邊鷺

前大納言為氏

跡つけり鷺を立てみれはたゝ河らの水の白波

平兼盛か小井の鷺をそ冬のよみ

つけゝる小　三条院女蔵人左近

大井河をろ山風のさむけきに岩うつ浪を雪かとそ見る

建保五年内裏歌合に冬河風

道家内大臣

漕ぬる白浪に小舟こほりし難波の浦の舟の下道

道助法親王家五十首歌に

正三位知家

浮雲はそれもみえぬさゝ波のよせて汐みち奥つしら波

文保百首歌奉りける時

津守国冬

吉野河岩浪そ年くれぬ雪にはあらぬ花もゝ乃

寛治二年百首歌に歳暮

前大納言資季

いくかへりあらぬ年にかへるとて身にそつもれる

百首歌奉りし中に　花園院御製

わすれしを待むとしのまの袖にとまりて暮ぬる

中納言になりて侍りしとし光俊朝臣
よませ侍りける春日社の五十首歌合に
前中納言高定
萬代としるしの文のそらに今年も月日の数も定まれるよ
歳暮祝といふことをよませ給ける
御製
いまはゝの小年の暮とともに思ふかないそぎなきまで
あらたまの年